

「船頭町」子どもの頃の思い出

高司良恵

(会員 佐伯市宇山)

船頭町の商店(その三)

(8) 精米所 西野精米所・小山精米所・高橋米屋

浦々の船が船頭町の浜に往来する頃の浜丁通りに
は、精米所・米屋が三軒あった。池船橋の石段を上
がった所に「西野精米所」、浜丁の下の角に「小山
精米所」、その中頃の所に「高橋米屋」があった。

西野精米所には、おおらかな気持ちのいいおばあ
さんが店先に大きな丸火鉢を置いて、船から上がっ
て来る馴染客の応対に余念がなかった。客は皆それ
ぞれに吠^{かます}や袋、一斗缶などに入った穀類を預けて町
に用足しに出掛けて行った。その間に精米や精麦そ
して製粉をしなければいけなかつたので、いつも忙
しそうに機械が廻っていた。西野精米所は機械が奥

にあったので、立ち入ることは出来なかつたが、機
械の音やベルトの廻る音がよく聞こえた。西野精米
所の二階はとても広くて障子をあけると、岸辺につ
ながれた船・出船入船が眼下に見られ、対岸の池船
の家並みがよく見えた。遠く剣崎の浜も見えた。と
きどき下の精米機やベルトの音が聞こえた。

西野の広ちゃん、梅ちゃんと幼友達だったので雨
降りの日の遊び場はよく西野の二階に行った。店の
中を通して二階に行くのでおばあさんに挨拶すると、
にこにこしながら、「遊びに来たん、上がんなさい」と
言ってくれた。そして時々カルメラを焼いてくれ
た。当時としてはハイカラな菓子だった。銚色に膨
れ上がりプツプツと穴があいて、食べるとポリポリ
とした音がして甘かつた。

仕事が一段落すると、あの大火鉢の前に座ってお
ばあさんは煙草をおいしそうにふかしていた。まさ
に肝つ玉ばあちゃん、みんなから好かれ親しまれ
精米業も繁盛していた。

用事を済ませ帰る頃になると、それぞれ加工され
た袋を受け取って浦の人達は船に急いだ。やがて船

が出てしまうと機械の音も止み、静かに一日の仕事が終わる。精米機とベルトの音が絡み合つてリズムカルな音、それにおじさんの粉まみれになつた眉毛や顔、前掛姿がなつかしく思い出される。

小山精米所は浜丁の下の角にあつた。家の横には珍しく大きな井戸と松の木があつた。浦の人達は加島酒屋、草刈歯科医院との間に浜に通じる道があつたのでこの道を利用していた。西野精米所と小山精米所のお得意さんはそれぞれ決まつていた様である。

小山精米所は主にお母さんが精米の仕事を受け持つていた。大きな石臼が対に並べられ、杵の形をしたものが左右に動きスイツチを入れると、天井から大きな帯状のベルトが小気味よく廻つていた。臼の中に、つき粉と**いう白い粉を入れて搗**いていた。時々、搗き加減



右側の家 「西野精米所」

を手にとつて調べたりしていた。小山精米所に同級生の秀ちゃんがいいたので遠慮なく遊びに行つては、精米機の動く様子を見ることができた。

当時、西野精米所・小山精米所も休む間もない程忙しく繁盛していたが、船が葛港に変わったのを機に、精米業も多大の影響を被つてしまった。

高橋の米屋にはあまり行つた事がなかつたが、一括して精米を、請負つていたのではないかと思われるが…。

戦争に突入、まず米の統制、配給制度となり浜丁に渡辺米屋ができたが、現在、園田米屋一軒となつてしまつた。精米業については私自身子どもの頃であつたので、関心度も薄く詳しいことはわからない。どんな穀物がどのように精米されたか……当時の食生活を思い出してみると、天にも届きそうな段々畑に麦や芋を作つてセ・イ・タ・でかるい下した重労働の姿……。

大麦・小麦・切り干しなどではなかつたのではと想像できる。麦飯・ふくらかし万十・かんくろだんご・ねり、せつせと作つていた味噌、浦々の食文化

のルーツを調べてみたいと思っっている。

精米所のあれこれ思い出しながら、浦代峠の下に大きな水車があった。水が豊富で水車が回転する度に、大きな水音が山にこだましていた。麦や切り干しなど粉ひきが多かったのではないかと思う。結構、水車小屋は大きくよく整備されていた。現在、鶴御崎トンネルと浦代方面に岐かれる所にあったように記憶している。

水車による精米、あちこちにあったのではないかと思う。例えば、青山の黒沢、蒲江の河内……など訪れた思い出がある。

精米も手軽に便利になった。都合に合わせて、いつでもできる自動精米機があちこちに設置されている。現在、西野精米所は、一時谷本散髪屋さんがいたが、今は閉鎖している。家そのものはあの頃のままでの姿で現存している。

小山精米所は精米機のあった所は、メナード化粧品事務所に改造され、松の木や井戸のあった所は軒を出して駐車場になっていた。家の前に立つて思い出をたぐってみたが、周囲の変貌もきびしく、特

にアタロー海優館閉鎖は淋しさ一入であった。

高橋米屋を訪ねてみたが、どうしても記憶は戻らずあちこち詮索、歩いてみたがわからなかった。

浜丁から浜に出る（幹線道路）道は、武林菓子店と園田米店との間の道がそのままの姿で残っていた。子どもの頃、泳ぎに行ったり遊んだりするのによく通った道と石段であった。

浜丁通りは、船の出入りの多い浜のにぎわいや、横丁の商店街の派手さはないが、なにかしら静けさもあり、ほっとさせる雰囲気があった。まだ当時のままの家も残っており、つい足を止めて見入ってしまう愛着がある。

その心情はうまく表現できないが、心の奥底でふつふつと生きている。このすばらしい心の糧となるふるさとを子ども達に残したいと思う。



静けさを感じる浜丁通り